

## 東海道品川宿～大井村散歩



\* 日程 平成23年 10月23日(日) 小雨決行

\* コース予定

品川駅 10時30分 中央コンコース時計塔集合&スタート

⇒品川宿入り口 ⇒お休み処「連」⇒清水横丁 ⇒土蔵相模跡 ⇒品川浦船溜まり

⇒御殿山下砲台跡 ⇒利田神社 ⇒台場横町 ⇒星野金物店 ⇒善福寺

⇒黒門横丁 ⇒三浦屋 ⇒一心寺 ⇒品川宿本陣跡 <昼食>

⇒品川宿交流所 ⇒品川橋 ⇒荏原神社 ⇒品川神社 ⇒板垣退助の墓

⇒東海寺 ⇒細川家墓域 ⇒浮世絵&切絵図(ビルの柱) ⇒東海禅寺 ⇒妙蓮寺

⇒三島宿の松 ⇒長徳寺 ⇒旅籠や釜屋跡 ⇒品川寺 ⇒海雲寺 <ガイド交代>

・・・鮫洲八幡神社 ・・・鮫洲駅 ・・・山内容堂の墓所 ・・・来福寺 ・・・土佐藩下屋敷跡地

(日本初のビール工場・黒沢明誕生地) ・・・龍馬の足跡パン ・・・立会川駅 ・・・龍馬像

・・・ぼらちゃん橋 ・・・浜川砲台跡 ・・・天祖諏訪神社 ・・・鈴ヶ森刑場跡

・・・品川区民公園 ・・・大井競馬場/平和島競艇場 ・・・磐井神社 ・・・慰労会会場へ

ちゃんこ カシ で宴会の予定

京浜急行 平和島駅で解散

### ◆八つ山(谷ッ山)と

#### 旧八つ山橋親柱

北品川北端の地名 武蔵野台地の丘陵付近に海岸に突き出た岬が八つあったことが由来

初代八つ山橋: 1872年に架けられた日本初の線路を跨ぐ橋(木造)  
石柱は、2代目(1914年)、鉄柱は3代目(1930年)の親柱

### ◆品川宿入り口

江戸四宿(品川、内藤新宿、板橋、千住)の中で一番の賑わいがあった。表紙の浮世絵が品川宿の入り口の図である。  
徒歩(かち)新宿一丁目から始まる。

### ◆清水横町

海辺に沿う地域であった為、飲料水は、飲用に適した井戸が少なかった。水屋から買入れるものと、付近の良水が湧き出す井戸から汲んで使用するもの、各自家の井戸を使用するものがあった。  
清水横町には、「磯の清水」という名水の出る井戸があり宿内の半数以



▼ 上がこの水を利用し、早ばつでも涸れなかった。

### ◆品川宿の町割り

品川宿は、徒歩新宿、北品川宿、南品川宿に分かれていた。

徒歩新宿: 八つ山橋～法禅寺門前

北品川宿: 法禅寺門前～品川橋

南品川宿: 品川橋～海晏寺門前

## ◆土蔵相模跡

徒歩新宿にあった大きな妓楼  
外壁が土蔵のような海鼠壁だったため、「土蔵相模」と呼ばれた。幕末、長州藩の高杉晋作など攘夷派志士が御殿山(前頁切絵図の青○)で建設中の英国公使館を焼き討ちする際に結集した。

写真内の提示ファイルは、海鼠壁があった昔の土蔵相模の模様



## ◆品川浦船溜まり

北品川橋辺りは、現在は屋形船や釣り船の発着場として賑わっているが、目黒川が江戸湾に注ぐところで、この辺りは漁師町だった。

右は、北品川橋から品川駅周辺の高層ビル群を望む。



## ◆御殿山下砲台跡

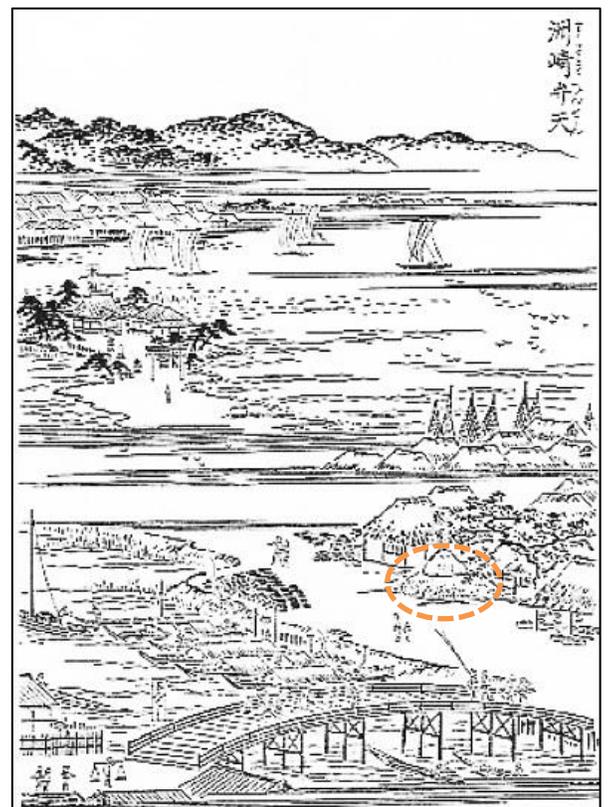
幕末、江戸防衛のために造られた台場の一つ  
御殿山を削りとった土で埋め立てて築いた。(名所江戸百景に削られた後の御殿山がある)

他の台場と異なり、海岸沿いに陸続きで丘陵型の砲台が築かれた。(安政元年1月着工、同11月完工 詳細図あり)

## ◆<sup>かがた</sup>利田神社(洲崎弁天) 鯨塚

旧目黒川の河口にできた砂嘴(きし)の先端に弁天堂が祀られていた。寛永3年(1626)、今から約360年前に沢庵和尚が東海寺の鬼門除けとして弁財天を祀ったことに始まる。明治になって利田神社となった。

寛政10年(1798年)5月、暴風雨の為、一頭の大きな鯨が品川沖に迷い込んだ。猟師たちは、総出で小舟を操り、天王洲の岸へと追い込み捕えた。この出来事はすぐに品川宿の人々に伝わり、珍しい海の生き物を見ようと、我も我もと浜へでかけ黒山のような人出、やがて江戸市中の人々にも広まり、「かわら版」にも取り上げられ、鯨見物の人々で貸船の値段をつり上げたということです。第11代将軍家斉の耳にも入り、「是非見たい。」とのおおせがあり、当時の浜御殿沖まで、鯨の死体を小舟にくくりつけて引いて行き、ご覧に入れた。長さ18mの大きな鯨の死体は、やがて腐り始めたので、やむなく解体し、油を搾り、背骨は分解して持ち帰り、家のあちこちに置いて、手水鉢の台や縁台に使ったそうです。これ以外の沢山の骨は、利田神社境内に集めて埋め、この上に建てたのが富士山のような形をした「鯨塚」の碑です。(楢円破線)



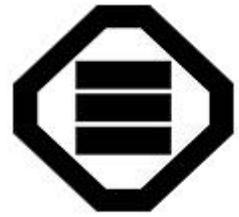
## ◆星野金物店

創業125年の金物屋 銅板建築

## ◆善福寺（時宗）

鎌倉後期 永仁2年(1294)の創建 時宗(じしゅう)は、鎌倉時代末期に興った浄土教の一宗派 開祖は、一遍上人で全国を遊行しながら踊念仏を広めた。元は藤沢遊行寺(時宗の総本山)の末寺であった。

家紋の言われ： 鎌倉幕府の開府の時に鎌倉で行われた酒宴の席順が、源頼朝、北条時政に次いで河野通信(一遍上人の祖父)が3番目で、「三」と書かれた紙が折敷に置いてあった。この席順の紙を上から見た「折敷三文字」の紋を頼朝から貰ったと伝えられる。江戸末期の名工伊豆の長八の龍の鍔絵(こてえ)があることで知られている。



家紋「折敷三文字」

## ◆一心寺（真言宗智山派）

元脇本陣の土地を利用 品川宿で唯一街道の東側に位置する。安政2年(1855)井伊直弼が「鎮護日本、開国条約、東海道随一の宿場町品川町民の安泰」を願って開基、宿場有志が建立 入口の石柱「貸座敷中」：旅籠・妓楼から転業した貸座敷屋が多かったことを物語っている。



## ◆品川宿本陣跡（聖跡公園内）

品川宿の本陣は、北品川宿と南品川宿に1軒ずつあったが、南品川宿は早くにすたれ、江戸時代中頃からは北品川宿のみとなった。北品川宿本陣は、大政奉還に際し江戸へ向かった明治天皇の宿舎にもなった。

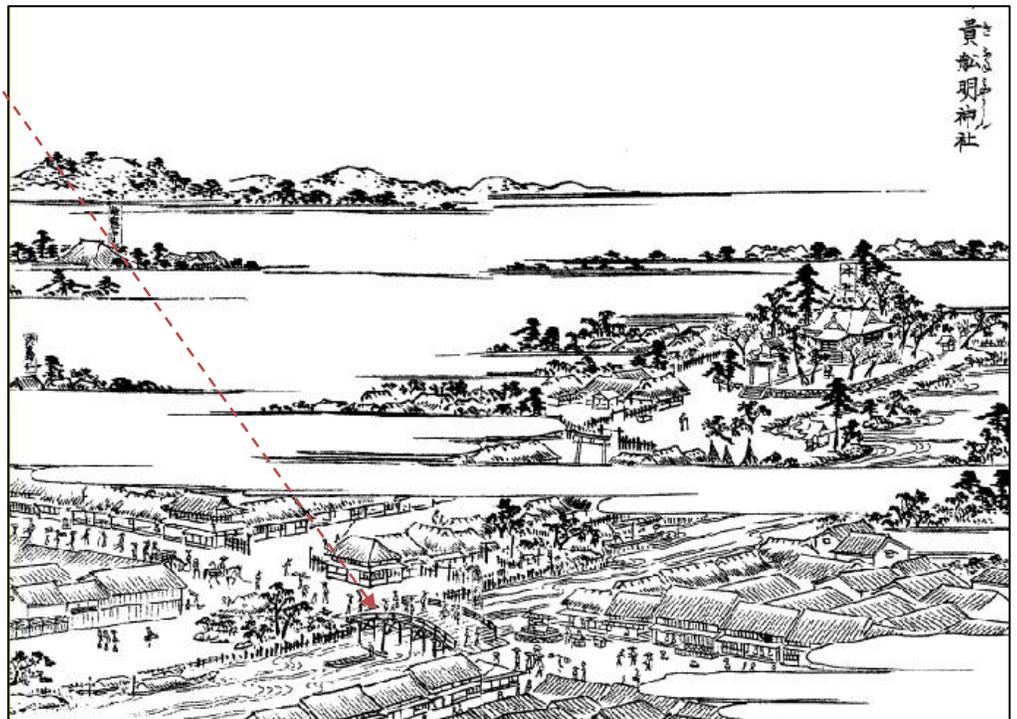
## ◆品川宿交流所 浮世絵、昭和時代の写真など展示あり トイレ利用可

## ◆品川橋

北品川宿と南品川宿の境にあった橋 境橋とも呼ばれた。南側は貴船明神社(荏原神社)の門前町

## ◆貴船明神社(荏原神社)

図は江戸名所図会の挿し絵 鬼平犯科帳 5-2「乞食坊主」にも出てくる。南品川宿の鎮守(産土神) 和銅2(709)年の創建 蛇行していた川筋を大正から昭和初期にかけて改修 現在の川筋は、神社の南側になっている。



### ◆品川神社 北品川宿の鎮守

文治3(1187)年 源頼朝が安房国洲崎大明神を勧進したと言われる。東海寺の鬼門に当たる為、江戸幕府の庇護を受けた。鳥居(社殿に近いもの)・水盤は、佐倉藩主堀田正盛(家光側近)が寄進

・品川富士 明治2年北品川の丸嘉講の人たち300人により作られた富士塚

丸嘉講では、現在でも7月1日前後に山開き行事を行っている

・一粒万倍の泉 境内の亜那稻荷神社にある泉 お金を洗い商店街で使用すると万倍になって戻ってくるらしい

### ◆板垣退助の墓 天保8(1837)年～大正8(1919)年

土佐藩士 自由民権運動の主導者として知られ、一般庶民から圧倒的な支持を受けていた。没後も民主政治の草分けとして人気が高く、第二次世界

東海寺塔頭・高源院に墓地があったが、関東大震災で高源院は移転し、墓だけが残った。



### ◆細川家墓域

肥後熊本藩・細川家の墓所

2代藩主細川光尚が藩祖忠利を弔うため東海寺に塔頭妙解院を建立 ここを菩提寺とした6代から16代までの歴代藩主・当主とその夫人、宗家一族の墓約70基がある。明治以後、妙解院は廃寺となり細川家墓域だけが残った。

◆東海寺前マンション 柱に地域に関係のある浮世絵や切絵図がデザインされている。

### ◆東海寺 臨濟宗大徳寺派

寛永16(1639)年 家光が名僧沢庵のために建てた寺 かつては寺域157,000㎡、塔頭17院の江戸時代きっての名刹、家光以降の将軍が鷹狩の際に頻繁に訪れた。小堀遠州作の庭園もあり、紅葉の名所であった。現在の東海寺は塔頭の一つ玄性院

### ◆妙蓮寺 顕本法華宗系単立 室町時代長亨元(1487)年創建

鈴か森で処刑第一号となった槍の達人・丸橋忠弥の墓がある。由井正雪の片腕として正雪の幕府転覆計画に加担する。しかし、一味に加わっていた奥村八左衛門が密告した為、幕府に計画が露見してしまう。そのため捕縛され、磔にされて処刑された(1651年慶安の変)

### ◆三島宿の松 (南品川2丁目児童遊園)

東海道11番目の宿場三島市の寄贈。1993年に植樹 (街道を往来する旅人のための道標であった

「街道松」を植えて、品川宿の緑の軸として次の世代に継承していく計画の一環) トイレあり

### ◆長徳寺 (南品川のお閻魔さま:閻魔堂拝観)

室町中期 寛正4(1463)年創建 木造の閻魔王座像は鎌倉時代の作、地獄絵図も迫力満点



## ◆旅籠屋釜屋跡

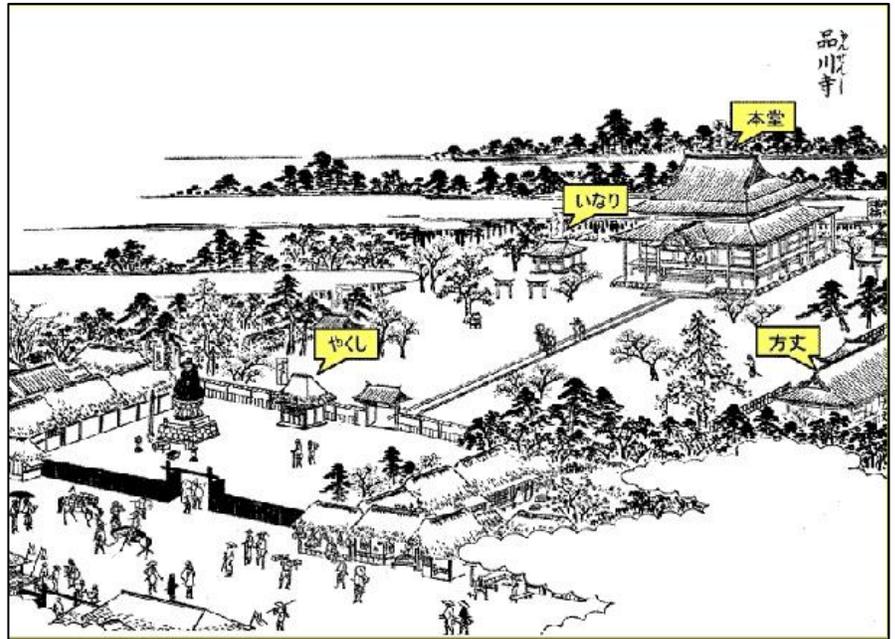
南品川にあった立場茶屋 新撰組が定宿として使用  
 立場:五街道等で次の宿場町が遠い場合その途中に、また峠の  
 ような難所がある場合その難所に、休憩施設として設けられ  
 たものが立場 茶屋や売店が設けられていた。

大変繁盛し、本陣のような店構えに改装したため、本陣と呼ばれた  
 長崎製鉄所創設、外国奉行として各国との通商条約調印などで活  
 躍した永井尚志<sup>なおゆき</sup>、新撰組(鳥羽伏見敗戦でも一時逗留)など幕府関  
 係者の宿泊記録が多く残る。



## ◆品川寺 (ほんせんじ)

平安時代創建(区内最古の寺)  
 江戸六地藏(第一番)1708年造立  
 洋行帰りの鐘 明暦3(1657)年造  
 立 パリ万博出品後行方不明とな  
 るが、昭和にジュネーブの博物館から  
 返還され、品川宿とジュネーブ市の  
 友好のきっかけとなった。



## ◆海雲寺 (品川の荒神さま)

鎌倉中期 建長3(1251)年創建  
 荒神堂は芝二本榎の佐賀藩下屋  
 敷にあったもの 寛永14(1637)  
 年 島原の乱で勝利した鍋島家藩  
 主が祀ったのが始まり  
 荒神さまは、火と水、台所の神様  
 荒神堂奉納扁額 信徒が奉納したもので最古は  
 安政3(1856)年

・平蔵地蔵 武士の財布を拾って届けた平蔵は  
 お礼にお金をもらったが、仲間から妬  
 まれ殴り殺されてしまった。それを哀れ  
 んだ財布の落とし主が平蔵の菩提を  
 弔うために建てた

・烏枢沙摩明王(うすさまみょうおう) トイレの  
 神様烏枢沙摩明王を祀るお堂がある  
 特に有名な功德として便所の清めが  
 ある。便所は古くから「怨霊や悪魔の  
 出入口」と考える思想があったことか  
 ら、烏枢沙摩明王の炎の功德によつて  
 清浄な場所に変えるという信仰が広まり今に伝わっている。



## 鮫洲



埋め立て前の鮫洲海岸(御林浦)

「鮫洲」は江戸期から現在の俗称地名。南品川宿南端から北浜川にいたる南北に細長い地域を指します。旧東海道沿いにあり、将軍家に新鮮な魚介類を献上する漁師町でした。「鮫洲」の地名の由来は、鎌倉時代、品川沖で大鮫が死んで浮いているのを漁夫が見つけ、この鮫の腹を割いてみると、聖観音の木像が出現。この聖観音は鮫洲観音と呼ばれ「鮫洲」の地名になったといわれています。この観音像は海晏寺の本尊として奉られています。今では埋め立てが進められ、昔の風景は面影もなくなっています。

### 鮫洲八幡神社 <http://www.ann.hi-ho.ne.jp/tomozawa/zinja.html>

鮫洲八幡神社のある鮫洲(東京都品川区東大井1・4丁目及び2丁目の一部)は旧東海道沿いにあり、古くは御林町(おはやしまち)と呼ばれ、獵師(漁師)町であり、御菜肴八ヶ浦(おさいさかなはちかうら)内のひとつに数えられていました。

御菜肴浦とは、新鮮な魚介類を将軍家に献上する義務を持たされた漁場でした。また、江戸湾4ヶ浦の漁業上の元締めとなって、優先的な特権を持っていました。八ヶ浦は本芝・芝金浦・品川浦・御林・羽田・生麦・神奈川・新宿の各獵師町です。

鮫洲八幡神社は古くは御林八幡宮と称せられていました。

主神として菅田別尊(ホンダワケノミコト)を奉斎し、氣長足姫尊(オキナガタラシヒメノミコト)を配祀、伊弉諾尊(イザナギノミコト)、伊弉丹尊(イザナミノミコト)を合祀しています。

創祀の年暦は定かではありませんが、新篇武蔵風土記稿、府内場末沿革図書等に記載されております。寛文8年3月7日書上帳にも記載のあることから、寛文年間(1661～1672)以前の御林町草創より建立され、同村総鎮守であったものと推測されます。

明治5年の神仏分離の制定前は、常林寺(来迎院)、来福寺が隔年持にて奉仕致していました。元文3年修復遷宮し、文化10年(1813)再建されました。

境内には土地柄、獵師の寄進した嘉永2年(1849)造立の狛犬や安政3年(1856)造立の灯籠があります。また、境内を囲む古い石垣も獵師の寄進したものです。

現在の社殿は昭和47年(1972)に遷宮されました。また、境内末社として出世稻荷神社、そして池の中に巖島(いつくしま)神社(通称 弁天社)と漁呉玉(なごたま)神社(通称 水神社)が祀られています。

## 土佐藩主 山内容堂(豊信) の墓所

山内豊信は土佐藩15代藩主で「幕末四賢候」といわれた名君。安政の大獄の際謹慎を命じられ、名を容堂と改め、品川下屋敷に蟄居(ちつきよ)した。この地を愛した容堂の遺言によりここに眠っている。

## 来福寺

真言宗智山派の来福寺は、海賞山地蔵院と号し、正暦元年(990)に智弁が創建、文亀元年(1501)に納経塚から、経を読む仏像(経読地蔵)を安置、現在に至っています。もと馬込長遠寺末、御府内八十八ヶ所霊場26番札所、玉川八十八ヶ所霊場74番札所、東海三十三観音霊場2番札所です

### 来福寺の縁起

来福寺は正暦元年(990)に智弁が創建、文亀元年(1501)に納経塚から、経を読む仏像(経読地蔵)を安置、現在に至っています。

当寺は正暦元年(990)藤原兼家が摂政の時、智弁という僧が開かれたものである。それから60年余りして世の中の乱れと共に当寺も衰微した。文亀元年梅巖という僧が、昔右大将頼朝が戦没諸兵追善のために写経を埋めたといわれてる納経塚(大井1丁目庚申堂)の傍らを通られ、その塚の中から読経の声をきかれて仏像を掘出し、この寺に安置したのである。その為にこの御本尊を別名経読地蔵を云われるようになった。この寺は古くは山号を海上山、海照山と云い、又境内に天満宮があったので天神山と呼ばれていた。当寺の古い特別信者に梶原一門があり、境内に権五郎景政や平三郎景時の嫡子源太景季の寄進された梶原松、或いは延命桜等があった。当時より桜の名所として知られ、現在も境内に雪中庵蓼太の「世の中は三日見ぬ間の桜かな」という句碑が残っている。(品川区の文化財より)

## 土佐藩品川下屋敷跡地

現在は当時を示すものは、その区画の境を示す道程度で、構築物跡等は何もない。

品川下屋敷は立会川から来福寺の南側までの約16000坪の広大な敷地で、土佐藩が江戸に所有していた7つの屋敷の中で最大広さであった。明治になってから、この屋敷跡に日本で最初の官営ビール工場が出来た。この酵母を元に地ビールが作られている。品川診療所の向かいの酒屋で売られている。

大正8年には、日本体育大学の前身の日本体育会の中学校があり、父がその教官であった、映画監督の黒沢明氏が生まれ、8歳まで過ごした。

## 坂本龍馬像

2010年、京浜ロータリークラブより寄贈された。2004年に高知市より寄贈されたものに続いた2代目。龍馬が立会川にいたと思われる20歳頃の顔を再現しており、履物もブーツではなく草履……。と全国的にも珍しいブロンズ像。NHK大河ドラマ龍馬伝にのって、地域活性化として龍馬にちなんだ商品が生み出された。龍馬ゆかりのカモ南蛮、砲台そば、……



そのなかの一つが龍馬の足跡パン

ボラの大群



## 立会川・・・ボラちゃん橋・・・涙橋(浜川橋)

すぐ先の鈴ヶ森の刑場に引かれる罪人とその家族がこの橋で涙ながらに別れたといわれるので涙橋と言われている。2008年に欄干の補修と灯籠が設置された。立ったままで会うから、立会川……………？

2003年2～3月頃にボラが大量に発生、一連のボラ騒動が起こり、全国的に立会川が有名になった。当時を思い起こそうという気持ちとボラが泳ぐきれいな川を願う心を反映し、上流の橋がボラちゃん橋と命名された。なおこのボラ発生の原因は、東京駅の地下の湧水をパイプで東海道・京浜東北線沿いに運び、立会川上流に放流した結果、その暖かい水温にボラが集まったのではないかと分析されている。なおパイプは水色で線路沿いにあるのが電車から良く見える。

## 浜川砲台跡

幕末ペリーが来航した際に土佐藩は砲台を築いた。19歳だった坂本龍馬もここを守備していた。現在は住宅地となっているが宅地造成のとき砲台の礎石が発掘された。

## 天祖諏訪神社

立会川をはさんで天祖神社と諏訪神社がそれぞれ祭られていたが、昭和40年に合祀され天祖諏訪神社となった。東海七福神の福祿寿も祀られている。

## 鈴ヶ森刑場跡 大経寺

慶安4年(1651年)に江戸の刑場として開かれ、槍の名人・丸橋忠弥、平井権八、八百屋お七等が処刑されたところ。現在は大経寺の境内に処刑に使用した台石やひげ文字が特徴のお題目供養塔などが残っている。

## 品川区民公園

品川区内で最大の公園、280本の桜ほか、四季を通じて沢山の花が咲く。人口池や散策路、サイクリングロードが整備されている。青少年野球場、テニスコート、プール(夏季)、BBQ広場、釣り堀、イルカ・アシカショーが楽しめる品川水族館、レストランなどの施設がある。

## 大井競馬場・平和島競艇場

区民公園と道路を挟んで東側には大井競馬場がある。この駐車場でのフリーマーケットは都内の最大規模である。また運河を挟んだ南側には平和島競艇場がある。

磐井神社 弁財天 東海七福神のページを参照

ちゃんこ士力 平和島駅近く、旧東海道沿い 住所：東京都大田区大森本町2丁目31-14

TEL: 03-3765-6750

<http://ameblo.jp/tabe-tarou/entry-10299282485.html>

## 真了寺…………… 本殿、入口の門、象がユニーク ペットのお墓

【所在地】 〒140-0004 品川区南品川2-7-25 【電話】 03-3471-8753

<http://www.tokyonanbushumusho.com/kobetsu/042.html>

【旧本寺名】 品川天妙国寺（旧顕本法華宗）

【沿革】 延宝元年(1673)の創立。

延宝元年に天妙国寺塔頭寺院として建立し、境内に祀る諏訪大明神の別当を兼ねた。

明治時代に寺社分離し、昭和21年真了院を改称し、その後本堂、庫裡を改築する。

## 東海七福神の祭られた神社・お寺 (出典 「東海七福神」 東海七福会)

[http://www.sam.hi-ho.ne.jp/s\\_suzuki/html2/oomori\\_cource.html](http://www.sam.hi-ho.ne.jp/s_suzuki/html2/oomori_cource.html)

1	寿老人	一心寺	品川区北品川 2-4-18 TEL 3471-3911 真言宗豊盛山延命院一心寺と称し中僧正弘道師に依り安政二年成田山分身の不動明王を本尊として安置され昔より延命・商売の守りとして伝えられている。本堂内陣には両大師、中国仏、飛鳥仏、光雲作観音像、寿老人等が祀られている。
2	布袋尊	養願寺	品川区北品川 2-3-12 TEL 3471-9224 正安元年の創建と伝えられ、天台宗明鏡山善光院養願寺と号し、御本尊は虚空蔵菩薩を安置され丑寅年生れの守本尊です。本堂内陣に鎌倉時代制作善光寺式分身阿弥陀如来三尊が祀られ布袋尊が安置されている。
3	大黒天	品川神社	品川区北品川 3-7-15 TEL 3474-5575 当社の由来は、文治三年(1187年)に、源頼朝が海上交通安全と、祈願成就の守護神として、安房国の州崎明神である、天比理乃畔(口偏)命を勧請して、品川大明神と称した。元禄時代すでに、大国主神・恵比須神が祀られている。
4	恵比寿	荏原神社	品川区北品川 2-30-28 TEL 3471-3457 約千三百年前、和銅二年の創建で古くは貴布禰大明神・天王社と称し品川宿の総鎮守であった。 天正十九年徳川家康より神領五石を寄進される等幕府の尊崇厚く明治天皇東京遷都の際当社を内侍所御行宮とされ四度の行幸、菊花御紋章を下賜された。本殿に恵比須、本社に大国主を祀る。天王祭神面神輿海中渡御が広く知られている。
5	毘沙門天	品川寺	品川区南品川 3-5-17 TEL 3474-3495 承応元年、権大僧都弘尊法印の中興で、真言宗海照山普門院品川寺と号し、本尊水月観世音菩薩は太田道灌公の念持仏と伝えられている。寺宝の大梵鐘は、久しく外国にあり昭和五年再び寺に迎えられて依り「鐘の寺」と呼ばれている。安置されし毘沙門天は御丈三尺余、足利期のものと思惟せられ高野山伝来の由緒深き御尊像として信仰を集める。
6	福祿寿	天祖諏訪神社	品川区南大井 1-4-1 TEL 3765-2061 浜川町と元芝の鎮守の御社・氏神様として仰ぎ親しまれる天祖神社・諏訪神社は、古くは神明宮・諏訪社と称し、かつては東京湾に面し、立会川をはさんで並び祀られていた。天祖神社の創建は、建久年間大井郷之図や来福寺の記録から西暦一千百年～一千九百年に遡る。また諏訪神社は松平上(土のミスプリントか?)佐守の庭内社に起源を有し、三百六十年以前には創建された。両社は昭和四十年に合祀。
7	弁財天	磐井神社	(大森 2-20-8)

磐井神社 [http://www.sam.hi-ho.ne.jp/s\\_suzuki/html2/oomori\\_iwajinjya.html](http://www.sam.hi-ho.ne.jp/s_suzuki/html2/oomori_iwajinjya.html)

延喜式内の古社で、別に鈴が森八幡宮ともよばれました。祭神は応神天皇、大己貴命、仲哀天皇、神功皇后、仲津姫大神です。旧社格は郷社で別当は密厳院、末社に境内の池中の小島に祀られる笠島弁天社があります。

『延書式』の神名帳に、「荏原郡二座小並磐井神社」とあり、『三代実録』の貞観元年(859)10月7日の項に、「武蔵国従五位下磐井神列二於官社」と記されています。

当社の縁起によると、敏達天皇の2年8月にはじめて創建され、貞観年間に日本国中国毎に八幡宮の総社を選んだとき、当社が武蔵国の総社に定められたといえます。

しかし、八幡宮が関東諸国に勧請されたのは鎌倉の鶴岡八幡宮が創建されたのちのことであり、中世以前ではありえません。『江戸砂子』や『和漢三才図会』が指摘するように、当社の八幡宮鎮座は、どうも天正年中(1573-92)とする説が妥当のようです。

中世に入り、永正年中(1504-21)に兵火に罹(かかり)、天文年中(1532-55)再び火災で焼失しました。天正18年(1590)に徳川家康が江戸下向の際に参詣し、五代将軍綱吉は元禄2年(1689)に参詣の折、当社を幕府の祈願所としています。八代将軍吉宗は、享保10年(1725)に代官伊奈半左衛門に命じて社殿を改修させました。

古くは、この社の沖合5〜7町先の海浜まで境内地であったと伝え、沖に鳥居が建てられていましたが、宝永年中(1704-11)の大地震で折損し、その後しばらくの間、礎柱だけが残っていたといえます(『武蔵演路』)。

<磐井の井戸>

社前の歩道上にあります。もとは境内であったこの井戸のあるところは、再三国道が拡幅されたため、境外の歩道上にとり残されたようになったのです。

この井戸水の霊水性を、心正しければ真水、邪心であれば塩水という形で宣揚し、万病治癒の薬水だとしています。またこの井戸の名称から、社名が生まれたという伝承もありますが、詳かではありません。

<鈴石>

山崎闇斎が明暦4年(1658)に著わした『遠遊紀行』に、「此社二一石アリ、之ヲ転ズレバ、則其声鈴ノ知シ」と記され、江戸初期からこの石の存在は著名で、鈴が森の地名発祥のもとになったと伝わっています。

ところが、同書にその頃この石が盗み去られたことを記しており、現在伝えられているものは、のちに補充した二代目の鈴石ではないかとする説もあります。

社伝によると、この石の由来は、神功皇后が長門国豊浦の浜で発見され、応神天皇降誕の時は産屋におかれしました。そののち筑前の香椎宮に納められましたが、また豊前国宇佐宮に移され、年月を経て宇佐宮の勅使、神祀伯石川年足に神勅があつて授けられました。年足の孫豊人が、延暦元年(782)に武蔵国の国司に任ぜられ、多摩川のほとりに居住し、当社に納めたのだといわれています。

<烏石(うせき)>

社務所に前述の鈴石と並べて展示されています。山型の自然石の上部に、墨絵の烏(からす)のような模様があるのでこう名付けられました。

江戸中期に成立した『武蔵志料』に、「麻布古河ノ鷹石モ、葛山烏石取之、鈴森八幡宮ニ納メ、名ヲ改メ烏石ト号ル」とあるように、この石は、もと鷹石とよばれて麻布の古川辺にあったものを、松下烏石(葛辰)が当社に移し、名を改めて自分の号をとり、烏石と称したのだといえます。

さらに服部南郭に依頼して、この石の側面に銘文を刻みこみ、小祠を建ててこれを祀り宣伝したことに対し、松下烏石の売名行為とする批判もありました。

しかし松下烏石の文人としての力倆もさることながら、この石は次第に有名になり、文人たちに好まれ、鑑賞のため当社を訪れる者が、あとを絶たなかったといえます。

<文人の石碑群>

社殿の北側の奥に四基の石碑が並んでいます。一は烏石碑で、元文6年(1741)3月に松下烏石が当社に烏石を奉達した由来を刻したものです。二は天明6年(1786)の狸筆塚、三は寛政8年(1796)の竹岡先生書学碑、四は文化6年(1809)のたい筆塚で、いずれも文人たちが使用済みの古筆を埋め、その供養塚に建てた記念碑の類です。

社前の第一京浜国道を北(品川方向)に約200m行くと、左側に京浜急行大森海岸駅があり、ここから帰路につくのが便利です。

(出典 「大田区史跡散歩」 東京史跡ガイド⑩ 新倉善之著 学生社)